報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	**Synchronic and Diachronic Aspects of Floating Quantifiers in English** (英語における遊離数量詞の共時的通時的諸相)
氏　　名	夏　思洋

論　文　内　容　の　要　旨

本論文では英語における遊離数量詞に対して共時的通時的研究を行いました。論文内容の要旨は以下の通りです。

１、現代英語における遊離数量詞

英語において、そもそも名詞句 DP を修飾する数量詞 all など、その名詞句と離れて、文中の幾つかの位置に“遊離”されることができるというものがあります。いわゆる遊離数量詞(Floating Quantifiers)(以下 FQ)です。FQ に関する先行研究は主に残置分析と副詞分析という二つのタイプの分析が提案されています。本論文では、残置分析に関していくつかの問題点を指摘し、副詞分析を適用し、そして、FQ の意味的、統語的な特徴を観察します。それらの特徴を基づいて、Chomsky の極小主義の枠組みの下で、FQ に関して新しい分析を提案し、その妥当性を検証します。本分析では、FQ が関連する DP やその DP を主語とする述部との間に、局所的な多重一致関係があると提案します。その多重一致関係が満たさなければ、FQ が認可されないと主張します。この主張点の妥当性を検証するために、本論文では、主語指向の FQ だけではなく、先行研究でよく論じされてない目的語指向の FQ の事例についても扱います。さらに、本論文では、FQ に関する一般原理を追求するために、英語だけではなく、通言語的な事実まで検討しています。結果として、本論文の主張点は FQ に関する通言語的で、様々な構文を適切に説明することができます。つまり、本論文の主張点は先行研究に存在する問題点を克服し、FQ に関して妥当的で統一的な説明を与えています。

２、英語史における主語指向の遊離数量詞の発達

現代英語において、主語指向の FQ は本動詞に後続する位置に出現することは許されませんが、古英語時代から、この語順が観察されます。英語の歴史に関する大規模電子コーパスを調査することによって、このような語順の発達が明らかになりました。調査結果によると、定形本動詞-FQ（V-FQ）語順の頻度は 1500 年代から衰退し始め、1700 年代以降に完全に消失しました。この語順の発達はまさに英語の歴史における動詞移動（V-movement）の発達の時期とほぼ合致しています。なお、V-movement が存在するフランス語には V-FQ 語順も許されるという証拠により、V-FQ 語順の消失は V-movement の消失と大きく関わると主張します。

３、英語史における目的語指向の遊離数量詞の発達

現代英語の他動詞構文において完全名詞句目的語は FQ に後続されることは許されません。しかし、このような語順は古英語期観察されています。よく知られているように、英語は OV 語順から、VO に変化したことがあります。コーパス調査によると、完全名詞句目的語-FQ 語順は OV 語順の出現に関係すると主張します。Tanaka (2015,2017)の分析に従い、OV 語順は目的語移動の結果となり、そのような移動がなくなってから、完全名詞句目的語−FQ 語順も消失しました。

４、受動文における遊離数量詞の発達

先行研究でよく議論されているように、FQ は受動文の文末、すなわち、受動分詞に後続する位置に現れることが許されません。しかし、コーパス調査によると、古英語期から、近代英語の中頃までに、そのような語順は観察されています。その語順の出現の要因は、ロマンス言語によく存在する受動分詞移動と一致と深く関連すると主張します。さらに、その受動分詞-FQ 語順は 1700 年代頃に消失した要因は、V-movement の消失にも関わると主張します。具体的には、V から T への移動がなくなることによって、受動分詞も vP の外に移動する空間もなくなると分析しました。